

時間経験と知覚の能動性

中山 康雄 (Yasuo Nakayama)
大阪大学大学院人間科学研究科

時間経験には、さまざまな層があり、複雑に関係しあっている。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚のそれぞれの知覚が時間順序を形成して主体に現れてくる。本発表では、時間経験の諸層とその構成的側面に関する最近の認知科学の研究成果を参考にしながら、時間経験と知覚の能動性との関係について考察する。

まず、本発表で主張される「知覚の能動性」の意味について説明しておきたい。「知覚の能動性」というのは、知覚内容の意図的改変を意味したものではない。実際、人間は知覚内容を意図的に変えることはできない。そうではなく、知覚の能動性のテーゼは、「知覚は、認識主体を背景に分析されるべきものではなく、行為主体を背景に分析されるべきものである」というものである。言い換えると、知覚は行為主体にとって意味を持つものであり、そのようなものとして構造化されている。これが、本発表での私の主張である。

哲学の伝統では、知覚は純粹に受動的なものとして扱われることがほとんどであった。その典型例は、Kant の理論哲学に見ることができる。Kant にとり感性とは、対象物から因果的作用を受けて表象を形成する能力である。このとき、知覚の成立は外界から内界へと一方向的に捉えられている。これに対し本発表では、注意を向ける主体は、認識主体というよりも行為主体として捉えられるべきことを主張し、知覚に関する情報選択が能動的になされていることを指摘する。

また、錯覚とポストディクション (postdiction) の現象は、対比して論じることができる。錯覚は、行為主体にとって有害なものではなく、錯覚の根底にある処理過程は日常の視覚的空間把握のためには重要であることもある (下條 1999)。これと同様に、ポストディクションの現象も、日常を生きる行為主体にとっては、有効な情報処理過程である場合が多いと言えるだろう。ポストディクションでは、空間把握の代わりに時間的変化や時間的順序の把握が問題となっている。

この知覚の問題の前提として私が主張するのが、次の知覚発達に関する進化論的視点である (中山 2015)。

- [1a] ヒトは、他の動物同様、進化の産物であり、ヒトの知覚も生存を支えるために進化してきた。
- [1b] ヒトの認知能力や知覚能力には、さまざまな制約と限界がある。ヒトは限られた能力の中で生存を継続するための効率のよい情報処理を身につけている。
- [1c] ヒトの脳では、情報は並列的に処理される。
- [1d] ヒトの脳は、高度に可塑的であり、長期にわたる鍛錬によって感覚レベルでの発達が見られる (例：ピアニスト、ソムリエ)。

[1e] 知覚の目的は、自分がいる環境の様態を把握することであり、その知覚に基づいて（生き延びるのに適切な）行動を決定することである。

認識主体としては、正しい外部世界の把握が最も重要なものとなろう。しかし行為主体の知覚にとっては、その知覚が正確であることが常に重要なわけではなく、むしろ限られた時間で生存に重要な情報を取り出すことが重要である（[1e] 参照）。これが、認識主体として人間を捉えた場合との違いである。

またヒトの視覚に関しては、サカードという自動的眼球運動や注意を向けられた領域の情報以外は視覚的情報処理が制限されるという不注意盲 (inattention blindness) という現象が知られている。つまり、自らの視覚処理の限界を受け入れてヒトは生きていかなければならないのである。それでも、生きていく必要のある情報に注意を向けて、その情報を獲得すればヒトは多くの場合生きていける。生きていくのに必要のない情報は処理されず、しかも、ヒトはこのような処理に気づかず、あたかも自分が外界の変化をすべて視覚的に把握できているかのようにふるまうのである。そしてそのようにヒトが考えるのは、そのような錯覚が、多くの場合、生きていくために有害ではないからである。

注意は、ワーキングメモリの容量の限界性と深い関係にあることが知られている。注意を向けることによって、情報選択が行われている。つまり、与えられた状況において、注意を向けることによって重要な情報を優先的にワーキングメモリに取り入れることができる。逆に注意の外側に提供された情報は、その存在さえも気付かれない場合がある。このような事例として、変化盲/不注意盲の事例がある (Noë 2004: 邦訳 p. 80f)。ちなみに変化盲とは、変化が自分のまさに目前で起こっている場合さえ、その変化に盲目であるという現象を指す (Simons and Chabris 1999)。

また、行為の繰り返しによって知覚に関する神経構造が発達するという脳の可塑性に関わる問題がある。類似の行為を繰り返すことによって知覚に関する神経構造が発達し、より質の良い知覚が可能になることからわかるように (脳の可塑性: ピアニスト、ソムリエ)、行為主体と知覚能力の構造特性は密接に関係している。

本発表では、以上のような考察を通して、知覚と時間経験の現象を行為主体の観点から哲学的に分析したい。

参考文献

- 中山康雄 (2015) 「時間経験の多層性」 「時間・自己・物語」研究会 第3回 資料.
Noë, A. (2004) *Action in Perception*, The MIT Press (門脇俊輔・石原考二 (監訳) (2010) 『知覚の中の行為』 春秋社) .
下條信輔 (1999) 『〈意識〉とは何だろうか — 脳の来歴、知覚の錯誤』 講談社現代新書.
Simons, D. J. and Chabris, C. E. (1999) Gorillas in our midst: Sustained inattention blindness for dynamic events, *Perception* 28: pp. 1059-1074.